伊豆母迺美多麻

初篇

一

ホ 2
276
1

門 加ロ
號 276
巻 1

玉妻鏡石と云國よりたてまつりける
ものになれ番目とふ國字いろは振
神代の大己貴命乃作らせ給へ
るとなむいへるは神字にして
海の玉くさくらふ神代文字を
あらはせる男康のかへるやくも神の御
かくもらいりて又一種のもんありける筆

川北丹靈翁著
芬木元達挍定

初篇

靈迺屋藏

かつ紀乃ともの深本の伊予西宮左大臣
康と云ふ所にて三巻をもち来りしをあやしと
いとしもなきところに例の能目をとゝめて
書家の筆の字を見ることも有らねはくはしく論
新たなるは古き論をもつて昔にくらふるもあらし
そのわたりを見くらへ候ふへくしてとめかたく
いおのれまた此書遣そのこころは美濃紙に

つゝみおもひけるにはなはたゆかしくて
うるはしき都にて殿のもとにまゐりて書
出るは殊に絵のけれは月の秋の初め
なくも筆もとり申しけるにこそ
こたへうかゝひ文化二とせ秋

員外侍従

醫師のちまたハ和蘭陀流の学ひ世ニ充
ちられ〳〵ふまて上も西洋めきたる人志らてのミ
おこなはれて数のうち十ハ七八外科ハすたれ廢
是をもつて漢方ハよもや〳〵と知らぬ人なむ
おほかりける世の中をあはれとおもひ世のみ
まなくハ和のこゝろみをなしたる人にハ心をつくしこま
くす全はそれにくすしのあきらかなる
はやりおほきは一かのこゝろにふかむ草紙作者と

ふる事をしるしたるあとの字ちゝめありて漢
土の人ハまづ羅國の文字西洋の人は西洋
乃事跡さへの人ハこれを用ひハよく安ミしらめ
となふ也然ばあきれハ字体ふくてまれめ
此ゆへしるしを根源しいふむ人あらなむを
こと持たやゆれこく思ひさき漢字を出しけて
阿蘭陀庭おもしるして音韻のこゝしまとま
つまかれ前野とつきて嵩木の先祖此書を

桜ふ意ミく学者やうやう多くまじ東京ハいよいよ
よ語く彼ろのみなや此出雲の名たり書と神
風の浮勢此國人唐清並川水の流るこの
おきつるを出い御一三嵩本の甚こ為抑古今
今ゑ無くかつ一律の書と大も是なし今は経
のなるあれは勇者まで此をこうあるみなられは
本もし此を遂取るへて厚く察せ人
あらはあれとも此後ろ子赤のく傳へ千

すの鏡ましきよはひとかたならむ古きれをのく
あやしの二字をふる八神のひゐるもちち婀
なをのしけのことや文久二年十月嗅犬
嗅鶴の舎のあるし　間宮永好誌

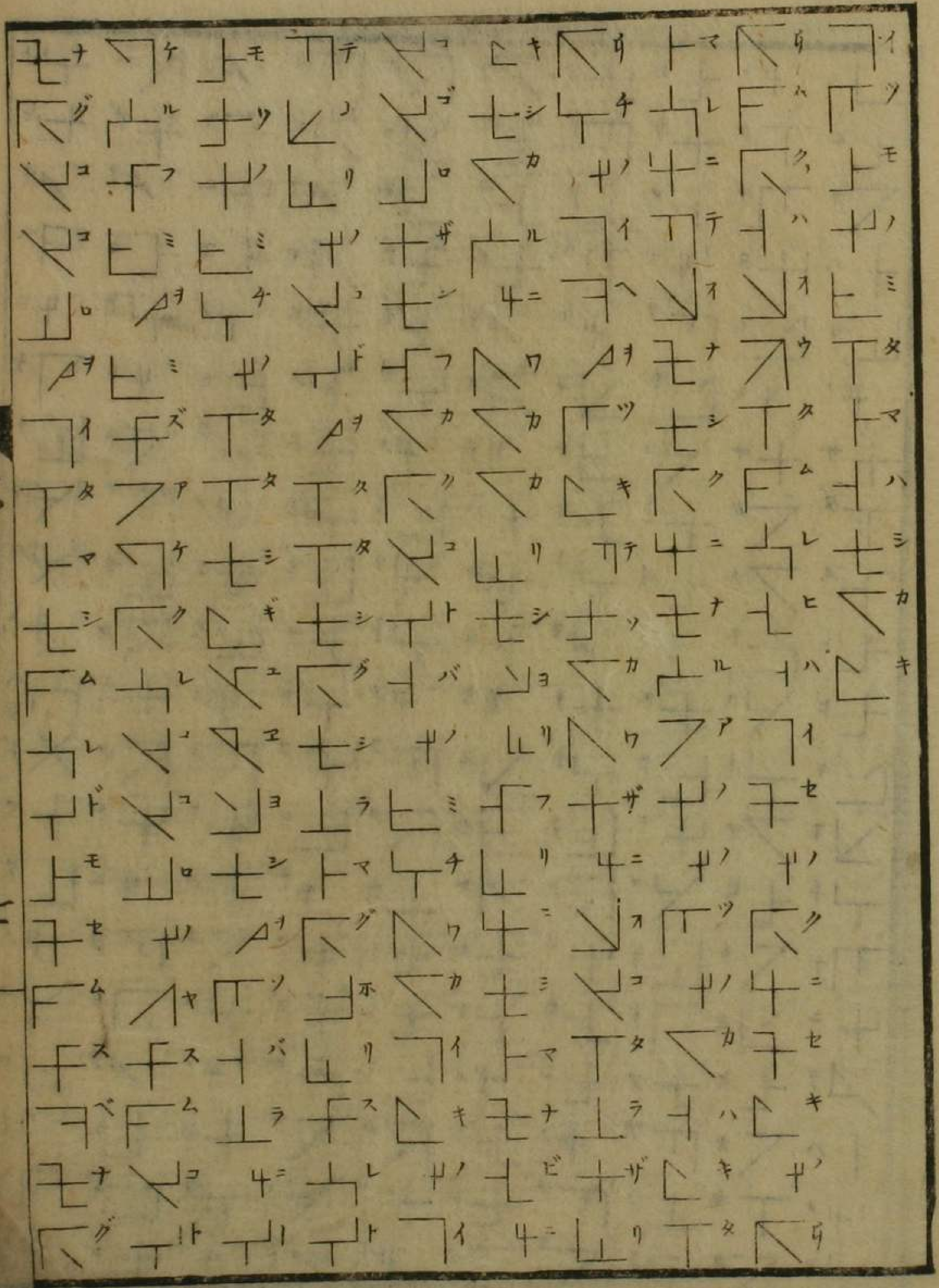
あなたまたし大日本の昔には元より
字といふものなくして漢土より借へし
なりそを字をもてなかなかもなきを世
しかとおもふ人多かるはかなきより
かきに不とさこころまして　おけつらかな
たるをも志なるすこてらひ伊豆母之美妥麻
てふ書を見るに出雲大神　大巳貴命
の借へ給ひし五十連音の圖あなりし

三種の宝字を得そのをしへによりと
つきて言霊の幸はふまことかきく
をむる字の用格の古事を極めたる
いともたふときふみそありける実にも
このときよりハ丹霊翁かあつき志に
よりてなれりし草業を芬本として
まめなる心をもてかうかへ定めて一つひ
ふみつ世に埋れしことをおもひ千とせ

の後に埋れむことをおそれわらく桜木に
のせて世にひろむることをみたまの
恩頼になもかくありける中にも
たふとしく外国のことのまくさの
蔵る世にこの言霊の林の神世も今も
千万の後もうちらに春霞のそみと
ともに晴りかそらむことのうれし
さあまるところを一言書そふるのミ

文久二とせの霜月

松平源信幹誌



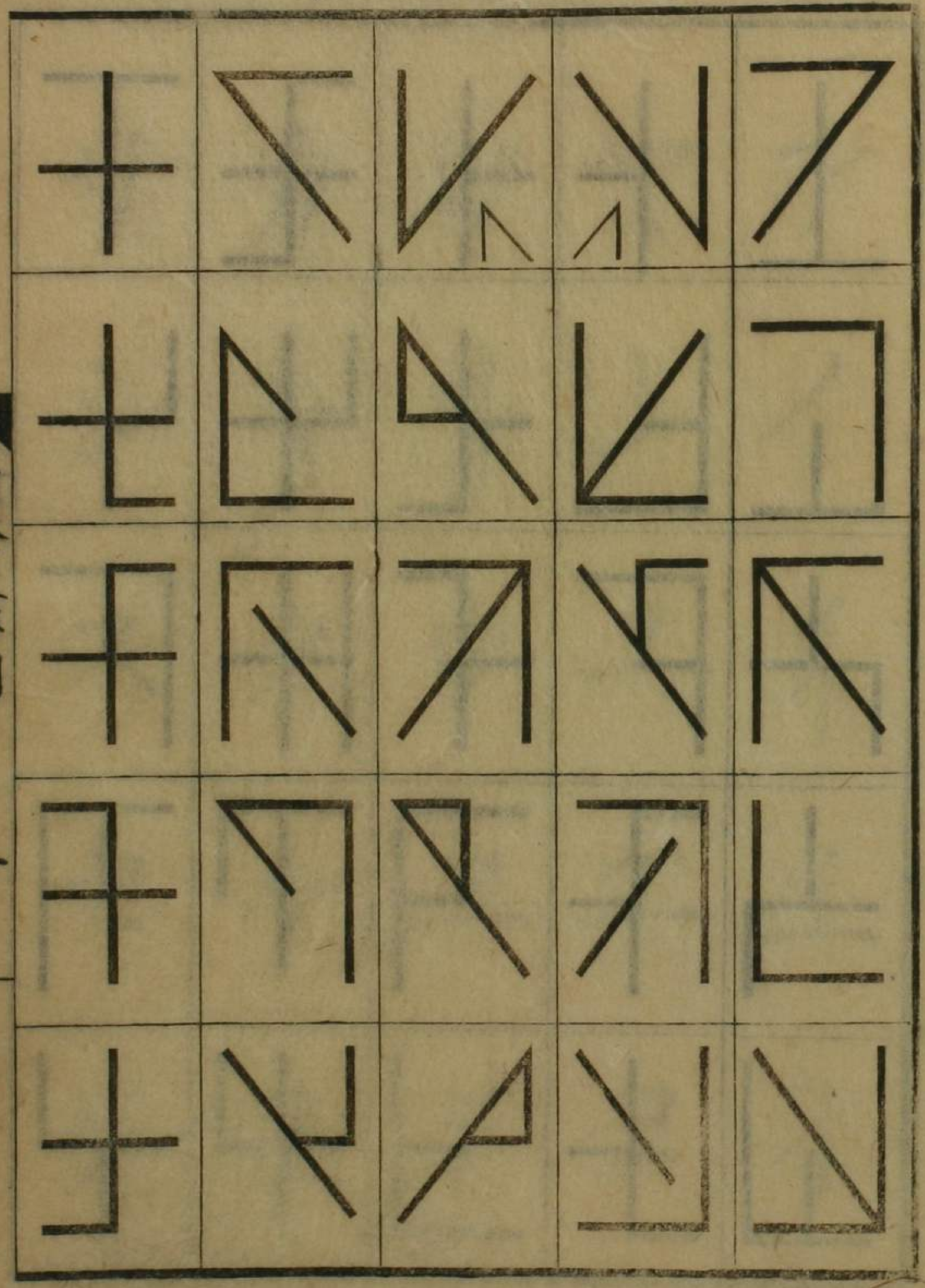
トシヲヘニケリココニムツヂマリノコロイヘノ
ヤザヲヒトニユヅリクニクニニツエヲヒギシ
ヲタニマノミヂノシリノクニタカノノサトニ
ツエヲヤスメシトギモドフミニノブルカコト
グオホナモナノミコトノツグラシシミクザノ
アナモジヲエテハシメテオホヤシマノモジイ
ノツラネノオホモトヲサドリクニモジノツガ
ヒサマニツキコドバノスミニコリイソツラネ
ノタデヌキニサカアルコトアヒカヨヒカタカ
ヨヒカハリノサダメヒビキオドテニヲハノコ

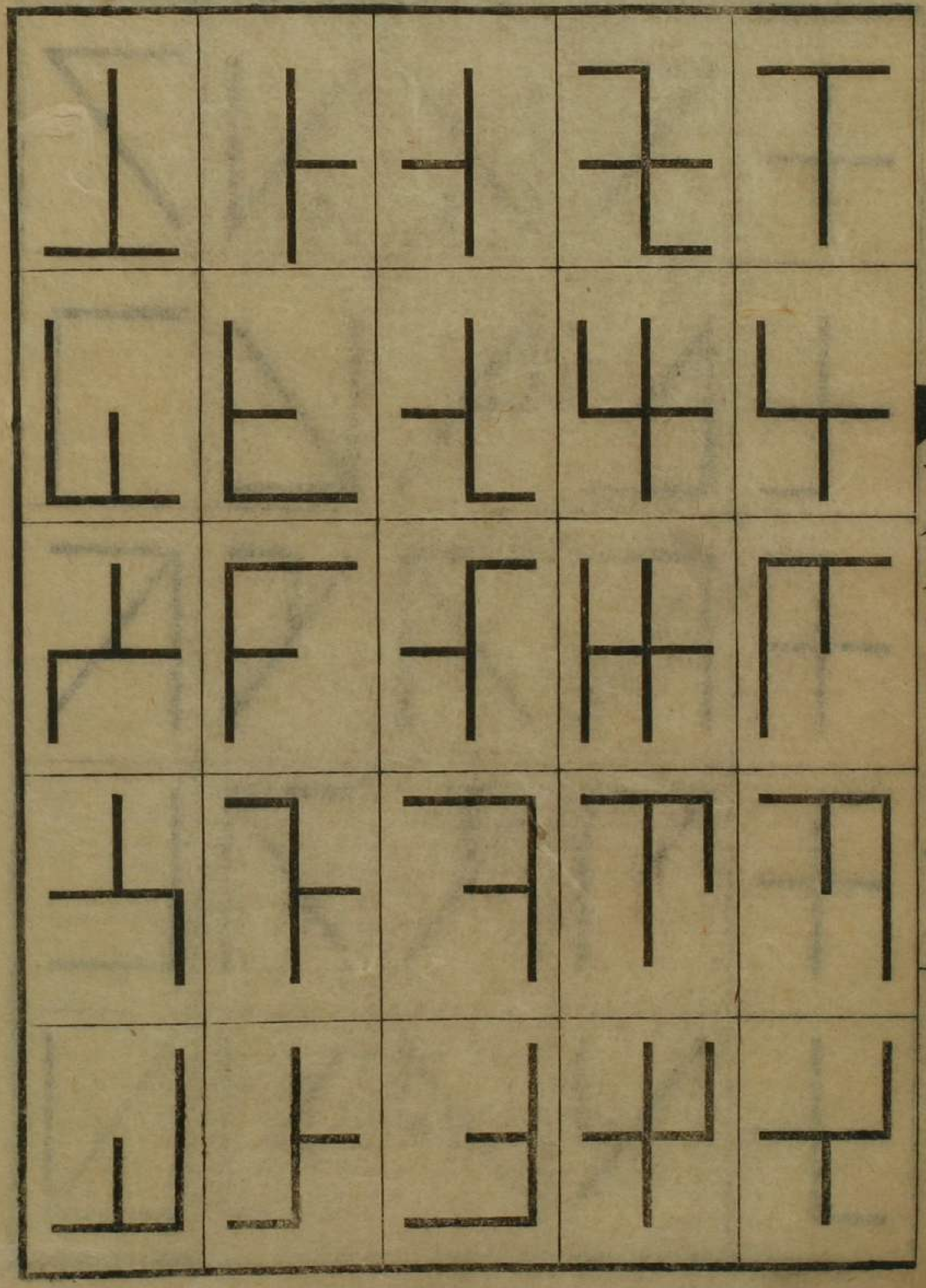
トコトミタマノクハシキノリニイダルマデツ
マビラカニアラハシイヅモノミタマトヅナヅ
ケケルサデシタカギハシツレトモイマダカギ
アラタムルニオヨバスヨハヒモハヤヤツヂノサ
ガニアフミナルオヒソノモリノシタクサツユ
シラヌカゲニリヅモレムホヒナゲレバイヤシ
コゴロノママニユゴロザシヲツキサグラキニ
モノシテヨニヒログリヒマナビノヒトニミセ
テヨトネムコロニシメサレケレバイナムシロ
イナミカダクテリケヒタレドイナナクコマノ

コトグニテタヤスグカキリムヨシナクテシバ
シタメラフリチニコトノハクサノシゲレレバ
トセムカクセムモリチステテオツキココレニ
リチマカセヒトノワラヒハサモアラバアレワ
スレヌホドヒトワダリカギミマホシクユノフ
ミノミチノオグナルフカミクサミルメハアサ
キアサガヌマキシニオヒタルハナカジミカズ
ミルタビニカウカヘテナラノコトノハカギア
ノメフタリミタリノトモトチニナニハノリラ
ノヨシアシヲトヒコゴロミシユキカヒノノギ

バノマジニシラユギノフルニコゴロモオドロ
キテトクルバルベヲマヂモアヘズカノオギナ
カエラミテシユドノハクサヲリゲツキテヨニ
モナタカキモヨシノノヨシノノヤマノサグラ
ノイダニチヨモカヲレトモノシツルナリ
フミヒサシキフタトセトイフトシノシモツ
キ
タマノヤノアルジカヲリキモドヒロシルス

上代阿奈文字之圖





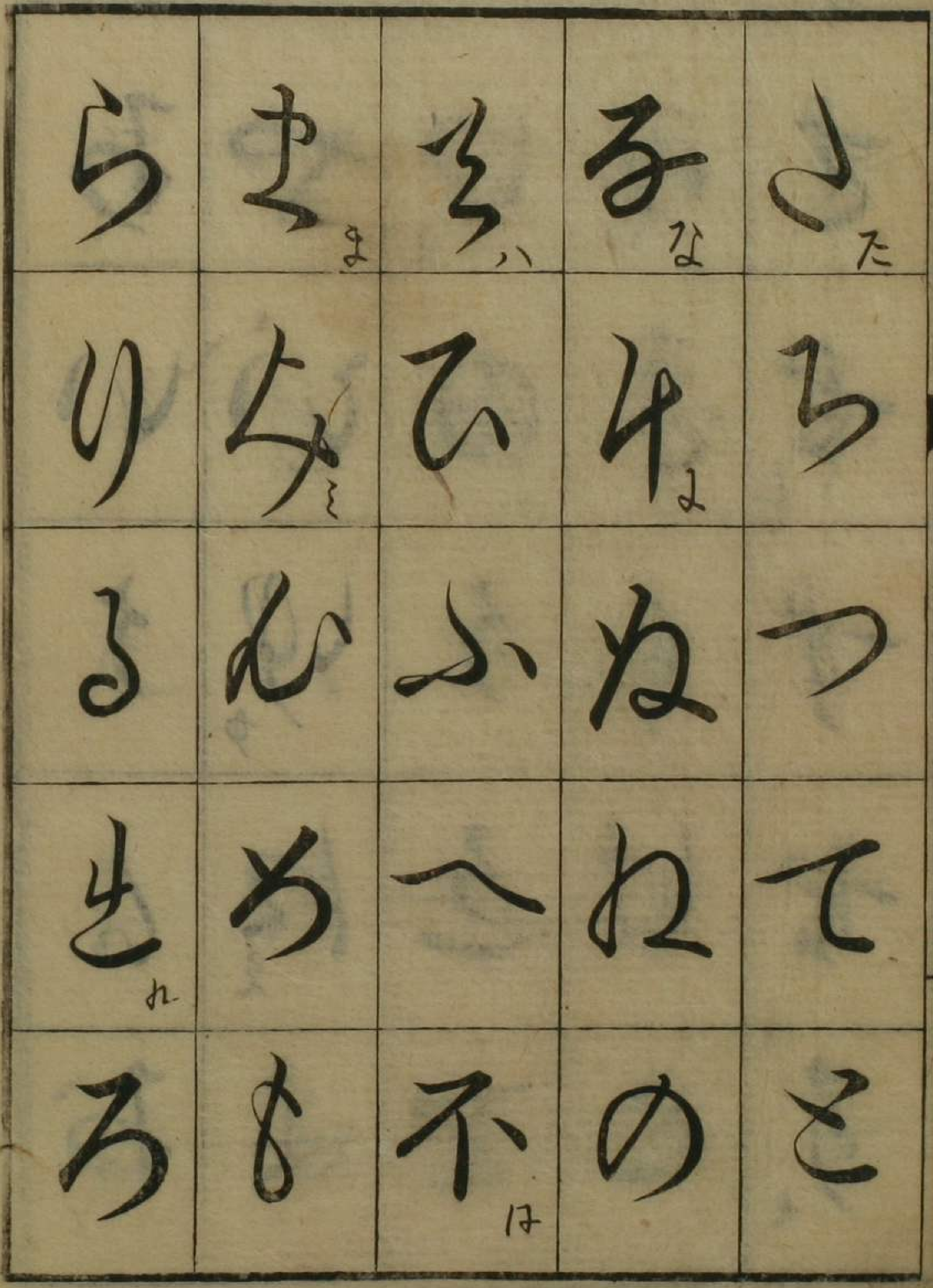
同代字

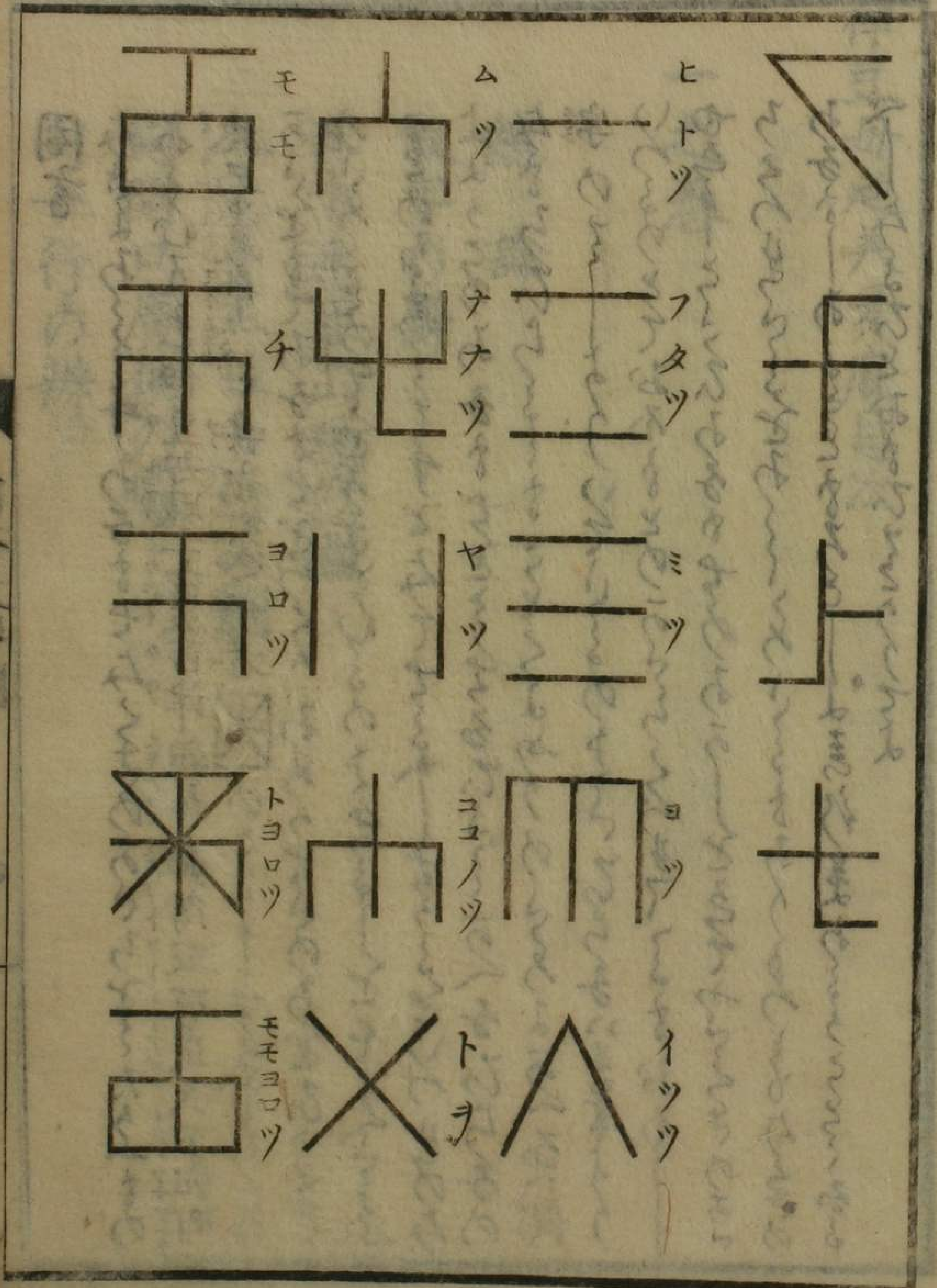
サ	カ	ワ	ヤ	ア
シ	キ	ヰ	𛄠	イ
ス	ク	ウ	ユ	ウ
セ	ケ	ヱ	エ	𛀀
ソ	コ	ヲ	ヨ	オ

字平同

さ	か	わ	や	あ
し	き	ゐ	い	い
す	く	う	ゆ	う
せ	け	ゑ	え	え
そ	こ	を	よ	お

ラ	マ	ハ	ナ	タ
リ	ミ	ヒ	ニ	チ
ル	ム	フ	ヌ	ツ
レ	メ	ヘ	ネ	テ
ロ	モ	ホ	ノ	ト


た
な
ハ
ま
よ
ミ
れ
は


ヒトツ
フタツ
ミツ
ヨツ
イツツ
ムツ
ナナツ
ヤツ
ココノツ
トヲ
モモ
チ
ヨロツ
トヨロツ
モモヨロツ

因言

みさきにわらすみなまもみくさのあさらさきたらふもの
あらむかしに伊豆母風土記五百津鉏神鉏所取取造天下宍町
太巳貴命之其宍町之形者
このふをもてみなもちとろくりあろらちさのあをひとくさ
のいろこそのりぞみきとむるのまちまししとをしへさまふ
ことのちよおちらすとみてちるよしちるをいつはのみ
よまうこのあなもちとへちなひさこ一のへなひらなの
みまろひらるゝもこゝとくよふりのさゝみは一のへ爾漢
字のをしよりいそりちのかたてひら字ハ篆書より
いろゝのとそおふもその一のさらくつせてるもおふし
由己千こゝろひあなもちのあいしとさそふさゝくさのあさ
ちゝろせうゝをおくしあひゝるまおりもつともみくさの
あなかしあるとおろとしよ云う美あるゝうとゝくなる
べしみるひとおもひまとのりてよ

伊豆母廼美多麻目次

一之卷

總論
假字の辨
五十連音出現の圖
五十音正位舌働の圖
同開口廣狹の圖
同十行の辨

平上去の三聲
二之巻
アヤワの辨
アヤワカサの五行并水皃の義
アイりオに一音の語なき辨
アの行のエの説并ア行の字餘
又外の字に変る事
アイりオの四ッ音ハ語の中下にてハ
おのづから省かるの辨
ヤワの二行の辞の活用
カサタナハマラの七行の辞の活用
三之巻
言語清濁并相通の辨
片通音の辨
鼻音の假字并國字用格
口語の音便

んとンの字并假字の辨

目次終

伊豆毋迺美夛麻一之巻

川北丹霊公翁著授

茶木藤原元達　校定

總論

この文章は皇國のいにしへおほなむちのみことい
づものくにきづきのみやに座居しておほろちたのお
ほみまつりごとを主宰どりたまふときはまへおほみ
おやのひとしくをうけたまひいほつちきのかみみこと

とゞりとゞしておかまちをとゞりたまひたゞみまた
うやしのわざををしへまたそのうつはをもておなも
じをつくりこともたまのさぎをふまくよ、うきをむ
ることのまじるしとぞさだめたまへりとなひなむよ
おなもじのまなななどなづけこのおかみよみたらこの
まけなどもてすべらみくよのおかみたがらよこど
のちをとうきとめることをとしへたまふこれぞわが
くによむかしあなることおけつとひとまただもお
きらうなりぞうるよううるさまのおうりのみやよお
めのちただみよちろやしたまふとき百濟國よりう

らぶみとみづきたてまつりしよりぞまなぶこと
となり、いづこともなく文章さまよ、おしへづたり、いや
さかりにさかりてすべらみくによのおぼえあることを。
ましなひづひよくちつたへよのみいりひつさひたま
ぶまなみよのおもちとりふものうれこなみあれども
たしかなるおずおなうしこそきたきこどよおくすや。
せうるよ、おやしくもくちびあるうなたまそのせう
へのくよ、竹野の里、與社宮よ、遊しそぎいづものみや
づこいづものおみくまちげののちたねいつものく
ますけとうりふものくらりいよしへおわなもちのみこ

ども、つたへひたまふ「フモ上」ゼ、みくにのかなもじと、
さだめこれぞまことの、おほやまとくにのおもじぞ
ありける、萬葉集より、いにしへよりいひつたへ
けらくそらみつ、おほやまとのくには、すべらみおや
のいづき、くに、ことだまのさきはふくにまだこど
みだまのたすくるくにと、いへりこれよりてかひ
こふれば、この五十連音の「フモ上」ゼ、こそ、ありがことだ
たまのおほもとをつたへひたまふ、ことをもしろそお
きらかなり、おのれわがのうしよりことだまの、の
りをほりして世よまでつたへし五十連音のうた「アカ

サタナハマヤラワ」の、のりよりて、もぢをみをむおと
めれども、皇國のもぢをもとひるよよしおくこころ
とやすむるよいだてずせりるをこびびわのすべら
みくにの「フモ上」ゼ、みくにのこころもぢをえそむ
せるて皇國のもぢなるびよことゝみだまのみのある
ことをとげらどもれりこれぞ、大日本の大道よりて天皇の、
天下とすべぢろしめすもみることをみたまのみちよ
ぞありける、そうるよこさびおもわえず天神の恩頼
おそいろかのくにすけありおるよぜ、みくにのこのた
もぢをえけれひとうかすあつくよ、このまく、ひろおく

ときハ天神(シンツカミ)のつくびとありさんハとそてがおろう
あるこころとおもてものするハなかなくいたらねば
ざあれどこれまでいよしくぶりのさづあれしと雑
波の癸冲法あふるぶんどもよみうたしめそかふうへ
えられてひらおぜつうひのことをおしまりそれより、
月々年々よかなづつうひのことをみさこうりよなりてい
りしくよだちおそると、いへどもおしひうち皇國(ミクニ)の字(モジ)
づうひのことをいふおのあけせバまことのいよし
へぶりハいこあるおのといふひといとまれよあひ、
書まいまえそるところの五十連(イツツラ)音(ネ)のならび

「フモ上七上下十」のかきもぜをおもて先代(イニシヘ)のまつくよ、
皇國(ミクニ)の字つつひあかびよ用格(カキサマ)の法則(ノリ)とおくらしして、
初学(ウヒマナビ)のみちひきとおすことのちよいふをみてそる
べーおれ皇國よさまれ天地(アメツチ)のみちよこころざしの、
ふつきいともとちハさざふところをだすけてよ、
もしあよおこさすみくさのかさるもちをなべておい
あもぜをいふつとめておぜをいふまたくぶれるよの、
俗人(ツネビト)ハおあいちかぜもいふおつともぐかしきことを
ハまじめのかきとみてぞるべーぞもくざととみやまよ
ののりハいよしくいざあきいざあみつふさいぞうしもの、

かくて、おほやけのくにを、どうかへいとおほみたからなふと
ちおふのかなすひとつのこゝろ、おのつからのかりとして、
おのもくしきのこゝろにおくるゝの、おほきまとを、そ
さへたまふずべろきのおほみちあり、さうるとのち
におほみまちのみことの「アモ上古」と、つくりおほきも
ずをまて、五十連音の圖をつくりごとのそのさきそ
ふまゝにうきさうするすことを、さし、たまひしからこ
とよして、いともたふときことをいふもうし、こゝにも
皇國のかなぞうるひなるびよ、ことゝくさまとまなぶと
まうくかなくず、おのそろに、おまふべくもず、ひともせ、

おやまりても、おのがこゝろのみだれさるを、知るべ
し漢字にて、假字かきさるのたぐひにおくずたとひ、
假字かきさるも、皇國の字づかひにわきらかならざ
らば、假字がきも正しからず、さればこちらしるに著
五十連音圖字とみて知るべし

假字の辨

假字ハ、漢の字義に拘らずて、一字一音の字として、天地
を阿米都知、日月を比都伎と借て書と云ふ也、五十烈
に借たるハ、阿伊宇延於、夜伊由延余、和韋宇恵袁、加伎
久祁古、佐志須世曽、多知都弖登、那迩奴泥能、波比布閇

保麻美牟米母良理流禮呂なり又書法の用捨は日本書紀古事記等の中なる歌を見て皇國の字つかひの正しきを知るべし但し右の五十字に限らず鞅以汁愛意耶怡喩叡用倭爲羽衛飫訶紀孔氣故沙士秀勢蘇哆馳菟底斗奈貳奴佞濃播被浮蔽朋末彌武賣毛羅利留例露など此外にも古書に用ひたる假字數許あり又濁音我疑具宜基耶自受是叙陀遅豆傳度婆備夫倍煩などの文字あれば正しく濁る語には濁り音の字用ゆべきことなり然れども古書にも清濁の字混り用ひたるもあり又清濁ともに兼たるも又二音に用ひたる假字もありたとへば素盞嗚尊とある素は「ス」と訓み又應神紀の歌に阿羅素破儒とある素は「ソ」とよめるたぐひあり又萬葉集には或は音或は訓或は事言の義を取まじへたるたぐひの戯書多し是を萬葉書となづけて是等は假字の例にはわろじそこしせかれども伊韋延惠於袁などの差別は正しくありけり是を萬葉書或は萬葉假字といふ亦萬字といふものなるを萬字といふは眞字と疾くおもひ誤れたるなるべし眞字といふは皇國の「フモ上・七」の事にて即眞字也

真字ノ事ハ始ニ著ハス上代文字故ニ漢字の音とも
五十連音ノ圖ヲ見テ知ルベシ

て書しが、ちかごろ、假字なり、又真字と、假字との事、種
種の説あれども、皇國の、おなもぞを、知らざるものゝ、
説なれバ、證とするにたらず、故に、世世のものしり人
だちまで、吾國にハ、もとより、字ハなき國といふ人多
く、片かなハ、漢字の、片端を切とりたるの、ひらかなハ、
空海の作なりなどと、いひて、皇國に「フモ上」・モ゛ト「ヰモ」
あることを、知らずかも、つとも無にまでそやそ、いろは
歌ハ、空海の作なるべし、えより、おなもぞハ、皇國の真
字なる事ハ、をしるよいふがごとく、おけつらふにおよ
ばず、たゞひさしく無よ、うづもれしこそ、うれたけれ

ちかきよをしるよ、いくるこゝろ、難波の、阿闍梨契沖
法師、日本書紀・古事記・萬葉集・なとよりて、考しえて、
考へられ、假字と皇國字の用格と正しハ、すべて、天暦の
ころまでの、書どもハ、假字と字との、用格正しきといひ
へりハそれに、從ひ、真淵・宣長・などの、諸考へ合せ、其中にも、
古事記の、假字ぞ、まことに正しくて、清濁ありとも、誤
あしといへり、せかれども、清濁の字ハ、混りたるもあれ
ハたゞしのに、清濁の字ハ、定めかたし、むかし今世の、歌よみ書
うくなどの人ハ、假字なくひ、平字の用格よ氣のつき格
別の、おやまりなつぎハ、契冲の勲しなりしたつハ、ちつハお

されども、むかしハわが皇國の「フモト上モ」五十連音の圖
ハ言靈のおほもとよして、おのづからの法ある事を知
らざるが由也、假大人達を始、古言學びの人どもかくいひ
まじへの、假字ハたゞしのありといへども、たく古書をの
みたのみて係由よ、い。ひ。の。ら。え。迄。お。を　あと、かき
わくることぞともいはざれバ、猶今も大方の人ハ、上
古の人の心もて定めつるものとや、おもひけむ、實よ
その正しき由ことよしを說著したる書をいまだみず、故
よ吾大皇國のことのもを正しく書とものと、おもふゆゑ、
五十連音の義をよく辨へて、國字の用格を正しくす

べしこのゆりを知らざれバ、漢字をもて假字書するも正
しからず、故よ五十連音をおぼえきらうましく、假字を用ひ
たバ、おのづから音聲のみだれずる、かぎりハ、假字もた
がふべき理りあらじかはし、へも、延喜の比より國風の、
文章よ漢字をまじへて書事起りて、あらおほく、しき、
詞をつくり、天暦の比よいたりてハ、いやさらよ、つく
り出語あと盛りよありて、其詞或ハ、漢字の音を國語
のごとく取出し或ハ、鼻音を加へ、或ハ、通俗の語を交
らしく混し通りせて、作りたるありしが然るともにその比
までハ、上古の音聲、さしもみだれざりし、時なれバ、音

の通ひ音便の用格なとハ、おのつからに自ところえた
りし人〻ハ、もとの假字をもしらずに、誤ることなく詞こそ、
ことなれ、こゝぞのこゝろハいづれのしくに須ふものとも、
宮風語の一格とハなりけるなり、さりけるに一轉の新語起
りしよりいくばくもなく國語を失ひそこなひしめるにい
たれるハ、是ぞ吾國字用格の錯乱たるもとゐなるべし
漢字の音の假字格ハ皇國の語に關らざれバ、知らずと
もことたりぬることなれども、二千有余年漢籍にな
れ俗のことばにも、あらぬ字音のまゝに唱ふることゝなり
て國風の雅言と、こゝろえしものゝ多し。たとへバ忠孝繁

昌障子・豆腐のたぐひ國語にまじへとなふるもの、おほ
かれバ、是等のことをも假字書にせむにハ、音の假字
にかうがへずこゝろえおくされバ、なくてハわきまへなり故
に真字の「イ」にハ伊以移「ヰ」にハ為韋井「ヱ」にハ愛江衣
「エ」にハ恵回衛「オ」にハ淤飫意「ヲ」にハ遠乎烏の字
なりと古へよりおぞきたれバ、これにしたがひこの不
ぢの真字をしりおかざれバ、假字書にするとき要た
らぬことなりもちられども、「ヰ」「ヱ」「ヲ」の字にこの漢字
とだしらに、あつべき字なきハ外國のことゝもおもひ
すべかしこれらのことまでも大皇國のたふとさなる

とはしるべし。又假字用格をしらむとならバ、新撰字鏡、
僧昌住撰 和名類聚抄 源順撰著 古言梯 楫取魚彦撰 字音の假字ハ本
居宣長が撰の字音假字用格并三音考によるべし。然
ども、そが中に、刊本の誤りもあり。且ことごとくそなはらず、
ちかおれども、いづれも日本書紀を始数多の古書よ
り輯めて、又假字に用ゆべき、一音の字を清濁を分けて、
撰みたれバ、假字を知るにハ、いと辨理よき本なりそ
れ〴〵にハ、誤りあり。又雅言假字用格と号け古言
梯を小本に作り、その中に、犯の字ヲカスとあるを捺て、
オカスと改めたるハ、妄りならずや、大祓の詞に、犯の字を

許掠オノカナにも又女犯ヲハカナにも用ひたるなり。そをえ
しらずて、ヲを削りたるハ、誤りなり。精くハ、大祓釋詞
の追篇にいへり。考ふべし。たとへバ、祖父・伯父・祖母・伯
母・老女・婦女・弟女・少女・老甥・などのごとく、音ひとしく、
心異なるを、オ・ヲとわけて、そのこゝろを、わかつことと、
知るべし。又石と岩とハ、異なる物なるに、古史に、イシ
にもイハにも、石の字を用ひられしハ、彼犯の字の類
ひなり。又余ガうつりし比の撰にて、青訓假字早引と、
いふものあり。訓の假字ハ日用の語の惑しきを聚め、
音の假字ハ漢音と呉音とを分け、日用の字を集めた

る懐本あり、是また、假字を求るよハ、たよりなり、その中に、
心得べきことあり、たとへば、意の字ハ、漢音い、呉音ゐ。
なるを、古書にハ、おの假字に用ひたり、又入聲の字ハ
なるたけ、假字に用ひざるぞよし、然れども、國號地名
などに、甲斐吉備伊服岐おハ、みえて、甲ハ韻洽かふ、吉ハ韻質
きち、服ハ韻屋ふくにて、入聲なり、これらハ、いにしへより、
用ひきたりしハ、ゆえあることなるべし、それハともあれ、
これらにならひて、わたくしに入聲の字を、用ゆるハ、
わろし、いかにといふに、ひがおぼえくハ、こゝろのう
ろくおきころなるを、むねとすれば、おのづから、入聲の字

を用ゆることをきらふなり、又醫意依ハ漢音い呉音ゐ、翳ハ漢音
えい、呉音ハ屋ハ漢音とく呉音おくにて、音ひとしからず、この類ハ、
言語の假字に借るハ、彼此かけたがへバ、よくわきまへて、用ゆべ
からず、なほ韻学のことおよび漢籍学ひのことハ、余がおぼ
ゆるところにわかざれバ、漢学の先達に学びて、知る
べし、いま皇國の、國風につきて、ひとことしく、二千年あま
り四百年ばかり、國ぶりを、学ぶともがら、假字を書
おぼえしことあれバ、いまくその假字の、おもむねをいふ
のみ、うかゞはずしも、皇國の五十連音字の、もぞつらひ
と異國風の、文章文字とおもひそて論つらふべからず、

異國ハ異國の國風あるハ、ことわれバ、それをおかしことを
よりふハわろし、又異國の大意とふこのこむひと欲り
せる異國風をまなぶものハ、ちずらくらくおもそだゞくへ、
異國風を学ぶとも皇國よすゝまるくともづゝハ天皇
の大道をよくわきまふべし、その天皇の大道といふ
ハ、おのまゝくかまれるし、天地の法則なりなぞの
天地ののりハ即五十連音なり、あるてよこのことなんた
まなぞの、かずつうひをおわきことのよさべし、それをわきまら
うよすゝまごとんらまのそこくきらをおきまうよせ
されバ、おやまることきそあつなおこのまぞつうひ、

なくびよごとんらきまよくらきときハ、おかろせかろと、
をきむるなるまろりことをそそしろ君よつかうまつる
よ父母よつかうるの道よ兄弟あるハ朋友よまじはる
るのみちまだうふことせうあり、そろかふうよまずず
せふるものごどきらふ言靈の法則とおきろごうよせず
しバ天地の法則となしめ、いきとしいけるもの、の
りかるびよ人體のとぶらきやかろき疾病の、おかおきかろき薬
方をわさへで、やまひの治不治との診察、その他木草
鳥獣虫魚金石土塩の類おるとかゝゆる物に至る
までごとんみらまの、のりまでなくずるもののおーかべきを

うへすめ皇國にうまるゝ人々ハことさらまづそのみのりを
よくこゝろうべし、されどよくよくこゝろえしうへハ皇國
ぶりと異國風との心を別て学ぶべし　うたに
たまくしげふたみちかけてこゝろえよ
うつくしかれのゝと　やまとなでしこと
かみよのふるごとく、大皇國の道を知らず、異國ぶり
とのミ学ぶときハいともゆるの舞足のふむところと、
しらざるにいたるべし、おのれこゝにおいて五十連音の
正位圖を著て國字の用格を喩すこと次のごとくにて
しるべし

五十連音出現之圖

經行以息分五段圖

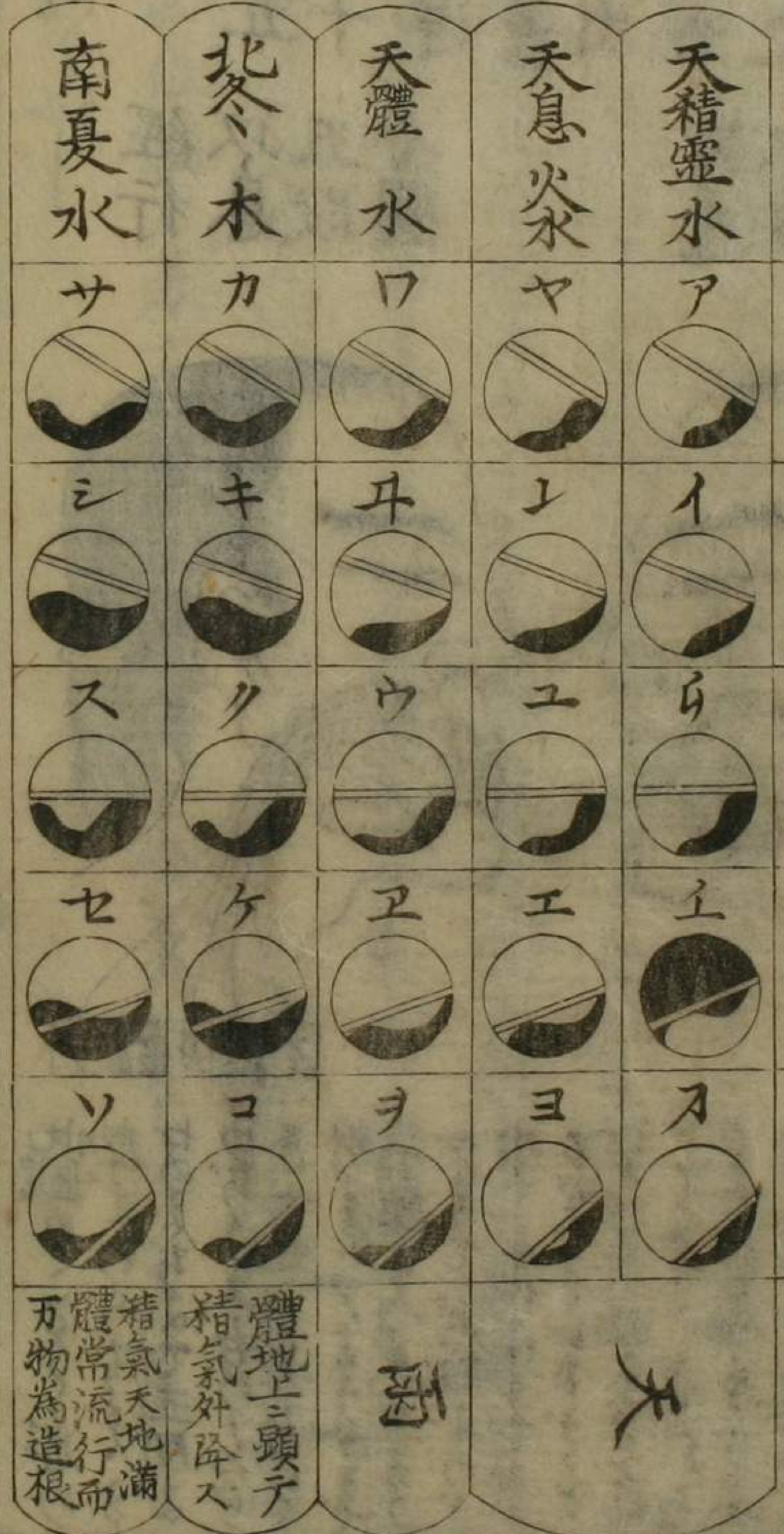
緯通以舌分十行圖

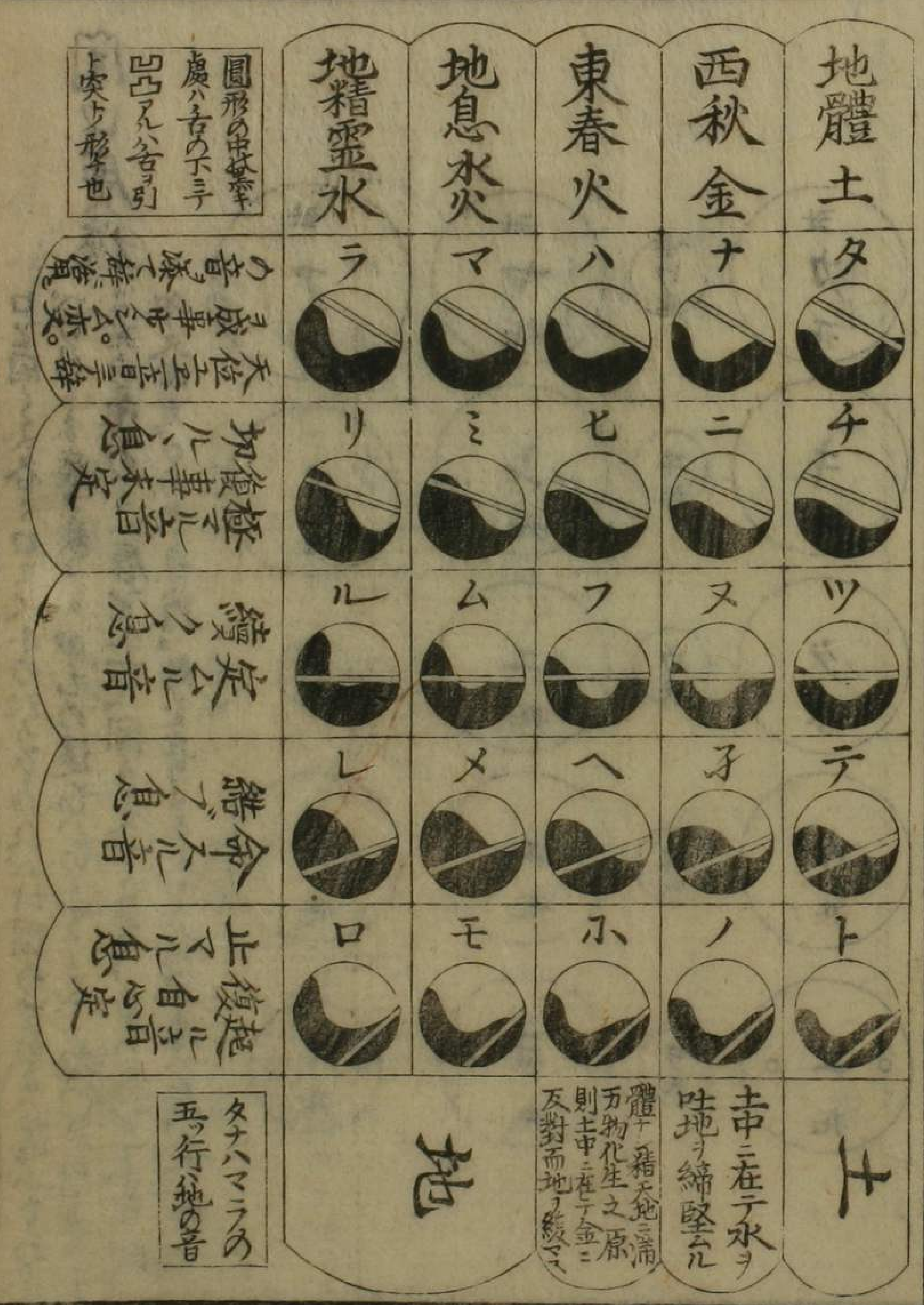
此圖のごとく息の聲におのづからこと口のかたちにて五段にわかり又舌のなだらき十行にわかれて別ちてアよりサまでハ下顋よりつぎタよりラまでハ上顋につぎ次ぐにのぼりて音のかゝはりおもむきをわかてり故に舌と息とそなへて音ハかろく舌の息にさかふ音ハおもし輕きをさだむるハ次にあらはるす圖とみてしるべし

五十音正位舌働之圖

圓形の中の白き筋ハ音を成ス息の出る図也

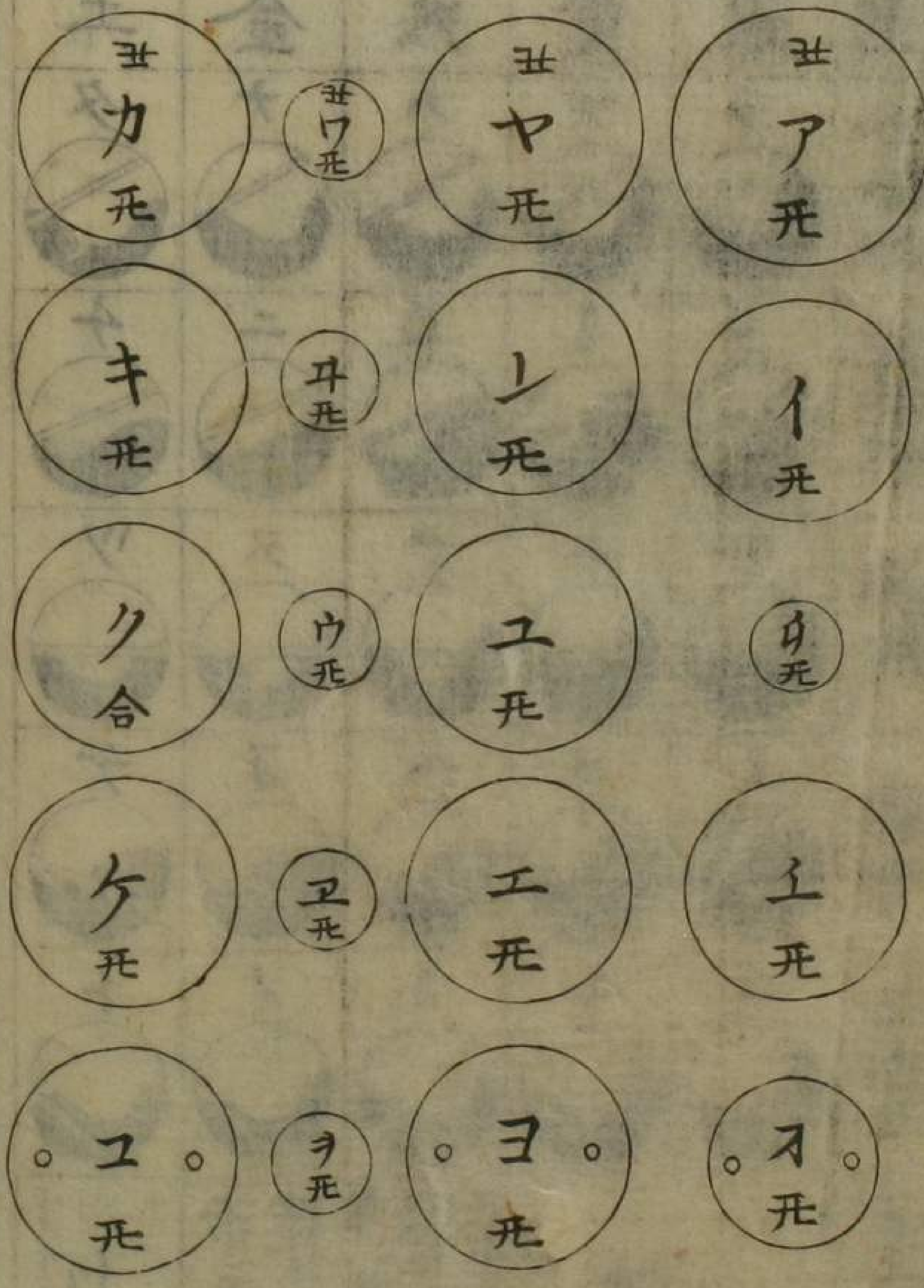
此図ハ伊豆毋之霊フモト七五十連音正位也始ヨ著図を見てしるべし雨るを何の御代よりかアカサタナハマヤラワへと次第せしハ此図のごとくヨてハイヒヰエヱヱと類音並て見る知の調べワろヨかヨヤワの二行をラの後前ヨ置しおとむるぺくても字で反せよハ妨けなしとハ古人の機徴あり然れども言霊を辨解するヨハ図のごとく本刻あらずてハ喩しかるべくれハ学者改めてよ

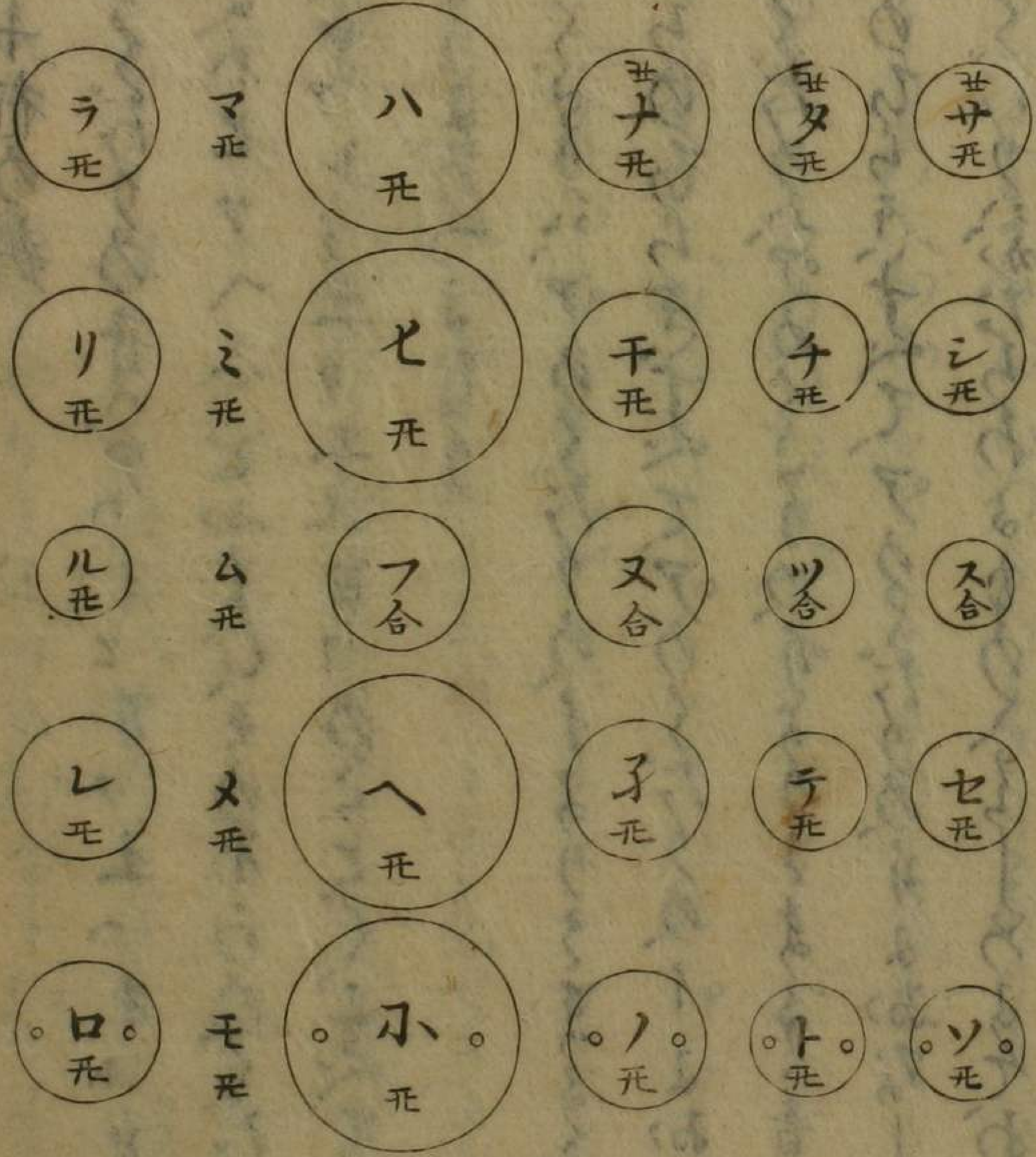




開口廣狹

口を開くに各〻口に大小のたがひあれバ此図の寸法にハ違ふもあるべけれども廣さ狹さの甲乙の違ひハひとしかるべし故○の内に上下に开の印あるハ唇を上下へ開き又下に斗り有ハ唇を下へ斗り開く印又両方に○のあるハ内に頬を寄る也又下に合字有ハ唇を合スル印也





十行の辨

○アのくだりの音ハ、アハイヒウフエヘオホと、音のすへてハ、ハヒフヘホとふくむ、そのほかのくだりハみなヤァイィユゥエェヨォのごとく、すべて○アのくだりよりいづるなり

○ヤのくだりハ、○アのくだりの、イよりうまるゝ音ゆゑ、くちのひらき、すべて、○アのくだりの、○イにおなじ

○ワのくだりハ、○アのくだりの、○ウよりうまるゝ音ゆゑ、くちのひらき、すべて、○アのくだりの、ウにおなじ

○カのくだりハ、かたちあるものゝ、くゝしめておこつ

づ、さうれて、まづおこつるハ、くちびるなり、くちハくちびるのきこゆるもの、おほかたもとよりてものゝ精氣、こゝにおごる由ゑ、くちのひらき、○ヤのくだりにおなじ

○サのくだりと、○タのくだりとハ、くちのひらき、おなじくて、このふくみ、ザダ○ジヂ○ズヅ○ゾド○とあるに、にごるときハ、おなじ、おとにあるなり、せうるに四ツきだの、ゼデハ、おなじ、おとになゝずうるハ、このなりの、うくなるべし

○ナのくだりのにごるおとハ、○ナのくだりと、おなじおとにあるなり、せうるに、○ツのおなじ、おとになる

ざるまうちなりのがくなるべし
○ハのくだりハ、ひよてひらきしろくつまるが、このくだ
りのさいごなるゆゑ、くちをひらくも又ことよひろ
く、又おとのひゞきもうすくかろくしてたゞしき
おと、まじるおとゞなるおと、まだつくらざるの
なりちかきよ、となふるときハ、ワ゜ヰ゜ウ゜ヱ゜ヲ゜のごとく、
ひくなり、このくだりハくちをひらくこと、ことよ
ひろくひらく也、ゆゑよこゑをうすゝるときハ、
ハながくよ、おとおもくなる也、おのづから、くち
をひらくよ、せまきハワのくだりのおとよひゞくなり。

たとへバ鯛・鯉とも、もとのまゝよ、タヒ・コヒ・ととなへでハ、こゑを
なおもく、タヰ・コヰ・となへバうるハしく、きこゆ
よても、喰を、クラヒ・クラフ・クラヘ・思を、オモヒ・オモフ・
オモヘ・とたゞしき、おとのまゝよ、となへでハ、おとおも
く、クラヰ・クラウ・クラヱ・オモヰ・オモウ・オモヱ・と、い
へバ、うるハしく、きこゆ、ちゝひゞくなり、又バビ
ブベボと濁るおとハ、およびて或ハパピプペポとくなる
おとよ、よぶときハ、くちをひらくも別まて、マのくだ
りと、ひとしく、ゆゑよ、バビブベボと、マミムメモと、
おとひとしく、つねよ、かよひて、もちゐらるなり、韻

鏡にハ、パマの二ッハ、唇の軽重といへども、ハのくちびる
の清音(スミオト)ハ、からのごとく、くちびるをひらくも、ことにひ
ろく、もとより、唇にハ、おのづからざる、おとなれバ、こと
ろえうることにて、韻鏡家にたゞちにわきまへ、いまだし
らに、その音をてにのしをいとすそこだふる人に、西會(アダラ)ね
バ紛りかざらし、余もはじめより、韻鏡学の事を知らず、
然れども、こゝろみに、うちおもへ、おぎしるをといふべし、
ことさらへぐ、唐土人(モロコシビト)の音(オム)ハ柔弱(ヤハラカ)にして、正直(スナホ)ならざる
音色、◎アのくちびるの引音となる、開口の廣きハ、◦のく
だりあるとハ、それにやうに、こゑいでつゞいるべし、ゆゑに、

おのづから、拗音より移して、パピプペポと發音(イヅル)な
るべし、ちかわどもおのがこゝろにハ、ハヒフヘホど、
それやうに、いふともおもふべし、そが耳にそれに
ちらとのふかきありさらバ、ハマのふさくだり、ハ唇
の軽重ありて、皇國(ミクニ)の人ハ、音清(コヱキヨ)く、詞(コトハ)つゝきをたゞふどみ、
バビブベボど濁(ニゴ)りバ、ひときざおもく、マミムメモ
どおなしおどよなりてくちびるに、おのづからべしそ
のマミムメモ、よりも又、ひときだ、おもきハ、パピプ
ペポなれバ、吾大皇國(ワカミクニ)の、おどよおどよりおもうし
と、漢藉參來(カラブミモウキ)てより、重音(オモキオム)をもおもくらべおぢひてた

とへバオモセハガルどいふを、ヒとシとひゞきおど
ま、となへ、そのひゞきにてバをパど、おきかへるのた
ぐひ、引張（ヒッパル）・安否（アンピ）・足満（タップリ）・竹篦（シッペイ）・鼈（スッポン）、おとのごとく、シツの
ちなおとよりつゞくハヒフヘホハ、おのづから、パピ
プペポど、かはるなり。こハくだれるよの風俗にてい
みしへのひとハ、新くぞうりし、おどかはるべし。いまよ新（ウタ）と
どしかどよおのづからよみくだしあへるは、バビブベボ
よりひとさだ、おもぎおどなりもちゐるまごとわを半（ナカバ）
濁（ニゴリ）の音（オト）どいふハいふぶうくもちゐいまかぎりは曇音（クモリオト）と云、
いふまどるわバ、重音のバビブベボよ、ひろしき、マミ

ムメモよりおもぎこゞゑのくちびるのこゝろぎお
もきよてよ、新るべし
○。マのくぶりハ、つぢのいきよて、とぢてのち、ひらくお
とありハ、そわよんいうひて、おのれのいきあるを、。ヤのくだ
りハ、イヤウ・イイウ・イエウ・イヨウ、どよろへ、ひらきて
のぢよ、どゞづるおとあり。又マのくだりハ、よこるおど
おぎよ、けだわぞも、マミムメモどよぶうすおもち、
よごりたるよて、バビブベボとかよへりかさでマの
くだりハ、地（チ）のいきあるをゑ天（アメ）のいきをうけてひ
ちむすぶ、おとあわバ、長号（オモギナ）ハ、おめ、やま、ちまこのみさ

み・お・み・た・み・た・ま・など、おのづから、マのくさりのおどをくみて、ことごとくをなせり
五十連音(イツツラネ)のたてぬきに、よさがあることと、まだおほてよひかるのよびのけぢめ、くちをひらくも、ひろき、せまきひきおとの、ことなるなど、いまだ皇國学(ミクニマナビ)の先達(サキダチ)のいはざることなれバ、余がちひさごとく、おもふめれど、世のなかによおるとおるものゝ、おやのますびをしらしめて、とりけさものゝさへむせくさき、そゝろなるみなみのそなはれかのあらむ カミトハキヲイフ 又さごのサガトハマレツキソノヲイフ あきものゝなしまして言靈(コトミタマ)ハ、おやつちのだいいきはし

て闢開(ヒラケワカル)の初發(ハジメ)すでに、ことわることと、神代巻(カミヨノマキ)に、そのころみえたり、またよろづのものハ、たかみむすび、かみむすび、ふたばしらの、みたまのふゆにておりいでそのなかにも人ハみな、おやつちの、ことわりと、そなふれバ、ことにもすなはち、おやつちの、ことわりと、そなへて、このよにあるとだちに、アギヤァオキヤァと、こゑをたづるハ、すなはちひとのさがを、おのづからすなはちいきハまだ、ことどもみたまのさがなり、そのおと、五十連(イツラ)にわかれて、よろふべき、いやしきハ、おるハ、のぼりくだりおるハ、さりとどまりおるハ、とぢひらくなど、おのゝく

異なることなくして、たとへバ、みゝ・め・て・あし・のたぐひ
きのべつあるのごとし、そのさまにて、ふたつのハ、よろきは
まわしぎいはまづうつる、ひとのこころのたく
ひとハ別にして、おのづからのことをつげ、ひとつのこゑを
まもるたぐひ、またきそのみのすとをきちなるそずれ
ぢうのみのくちに、ひゞくことくなる、そのもののくさま
まづきをさすのとういふ、そのもとハ、あまよぞといふに五列
の音の位をなせり。天地木水金火の、そなへにて、舊事紀・
神代本紀に曰、天之常立神より、産靈神まで、十四神
の御靈いまする、造化七世の神なり　クハシキコト　ツノチニアラ

ハスカミヨナナヨ　ノマキヲミルベシ　かく吾皇國のみならず、萬國諸嶋と
ても、天地のそなへなひぞことならしや、ちらわざも、異
國國の人ハ、おのづからのかなる五十音の、まゝに八音
現ハざるあらとみえて、天地の度に、聖人の才智を加へ、
日月の影を量りて、其理を窮め、陰陽五行、三綱五常な
どいふ號を、設ふけて萬の事を興して、さとせるなら
ん。是聖人の才智にて、凡人の及びかたきわざにぞあ
りける。ゆハ漢籍学びのきハ、異國風をさとるべし、吾
皇御國ハ、さらずして人の作をもて、教あるにあらずおのづから
おのづからおのわざハ、いきのまゝになたりて、別にこ

ところをまもらせざるなくしかれば、言霊(コトミタマ)のさきはへ
ふなるゆゑに、五十連音(イツツラネ)の位、經(タテ)、緯(ヌキ)、終(ヲハリ)、始(ハジメ)の、そなへをみだらず、
君臣(キミオミ)・父子(オヤコ)・夫婦(メヲト)・兄弟(エオト)のみち、おのづからごゝろにたも
ちまもるくなりて、おのゝく名をとなへて事をた
らすなり、是言霊(コトミタマ)のふみをしへなり、なりてに言霊(コトミタマ)の幸(サキ)を
ふ國、言霊の助くる（助クルハ足ラスナリ）國(クニ)と、稱ひつたへ、おのれをす、
五十連音とまてるを足(タ)らしいふことの不足(アカヌ)るなきを
いふなり、蓋陰陽五行三綱五常等ハ、異國の設言なれ
どもふるく此國に取用ひて尊むみたるなれば、今
さらにおけつらふによむやすむがわざも言霊のなすと謎

よくこゝろえしらべハ、陰陽五行にかゝはらず、なにのことを取
用ひても妨けなかるべし、このたぐひなることろうるハ、
こゝろし、猶くハ、二編一の巻に、いふをみよ

平上去の三聲

平上去の名目ハ、韻字四聲の名目にて、皇國(ミクニ)の字(モジ)にハ
用なきことなれども、古よりこゝに、借り用ひるのみ、
漢字(カラモジ)の四聲とハ、別なりき、抑平聲ハ、本言にして甚輕(イトカロ)く、
上聲ハ、平聲とハ、いきほひ、おもくして唱ふるに、下顎(シタアゴ)を、
前へ突く意あり、去聲ハ又少しおもく唱ふるに、顋を
とかくおす意あり、此三聲の意味(コヽロモチ)ハ、アヤワ三行(ミクダリ)の

差別(ケヂメ)をもてはかどるべし。アヤワのくばりのことは二の
巻にあらはすをみよ。ねに古書(フルフミ)に上去の標を加へたるは、
京畿(ミヤコ)の人の音(コヱ)を旨(ムネ)としたる、訓音(ヨミコヱ)の證あり。難波の契
冲云く、平上去の三聲を一音(ヒトコヱ)にていはゞ、日ハ平。樋ハ
上。火ハ去。也又毛ハ平。蹴ハ上。氣ハ去。也二音の言(コトバ)ハ　橋ハ平。
端ハ上。箸ハ去。又弦ハ平。釣ハ上。鶴ハ去。鴨名鳥ハ平聲なる
に鴨川といふときハ上聲、鴨の社といふときハ去聲なり。
是等みないまの京畿の音なれども、いといにしへが
かはりたるや、おなじきや、なほさだめてもいひうべしと、
いひわきがたき故に今これを精(クハシ)くいふときハ、ハシにハ三

聲の別ありて、シハみな平聲なり。又鳥の鴨ハ、二音皆ナ
平聲なり。鴨川ハ、カハ上聲、モハ平聲なり。鴨の社ハ
カハ去聲、モハ平聲なり。しかれども、京畿のほとり
と遠くへだたる國々(クニ)にてハ、三聲の己がろ穩に
てひとしからざるなり。是ハ其國地(クニ)のなまりにて、
その土地(トコロ)のそれが正しきにてうつりて、京畿の音を、
訛言(ナマリ)とおもふべし。尤京畿といへども、ことばハいやしき
のもだゞきにして、年に月にうつりゆくハ常なり。
或人いひけらく、京畿もいにしへのことばにかはらず、
足利将軍の時代(トキ)にハ、おのづから関東のことばおほふ

ぐ信長・秀吉の時代にハ、おのづからかくのごとくな
おかしとおもふに、いまの京畿ハ、なかなかいにしへのま
まなるハ、おほからずといへり、いかなるわけなるべしゆゑ
に、そのかはりのありたるハ、ことばの癖なきにしもあら
ず、又かゝりて假字をあやまるべきにもあらず、頼みて
あやまれるハ、聲のくだれあり、音のくづれたるハ、アヤワの
三行の差別をも、七却平上去の三聲を混し、又口語の音
便晃音の用格又音の位をうしなひたるより、字の用
格もまぎるゝなり、又ことばの移り轉るハ、年月の経
徃まくのみならず、いにしへとても、京とわかぎ邊土に

てハ、このだなまりにて、よびならはしのたがひあることなれ
今もおなじ、萬葉集の防人の歌に、天地を阿米都之
とよめりしを、古事記傳に或人の説を引て、古へ東人
ハ、すこしのしらべをかへずて、つたへきたるまゝに、いふなれ
バ、京のあたりの人の歌よりも、かへりて古言の拠と
なるべき物ぞといへれ共、都知を東言に都之といへる
なるべしといへる説ハ、心得がたし、今も陸奥越後の
片田舎にて八土をちちといへり、かゝらバ訛言にて古
言のよりところとすることにもあらず、又不平上去
三聲のなまりハ、このましからぬにいふことぞ、韻字四聲を借

るのみ、そを借り用ゐるも、漢字をもて、假字書に、なる
うへのことなり、吾大皇國の、もとつのひ、ことく、
この意をもて書こくるに、おのづからに皇國の字
用格は、五十連音の正位そのさだを詳にして書べし
むアヤワ三行のいとだしきいきのいそりをよくこ
ころうるときは、哥に文章につくにまたうふこと
なし、なほ二の巻にわらはす、アヤワのるをよく
こころうべし

伊豆毋廼美夛麻 一之巻